

日本一暑いまちは屈指のラグビータウン ワンチーム体制で目指す持続可能な未来

《ラグビータウン熊谷》の形成

日本代表が優勝候補のアイランド代表やスコットランド代表などを次々撃破し、史上初のベスト8進出を果たした《第9回ラグビータウンワールドカップ2019日本大会》(2019年9月20日～11月2日、以後、本稿での記述はラグビータウンワールドカップ2019)の興奮は、今も記憶に新しい。また、日本代表がスローガンに定めた《ONE TEAM(ワンチーム)》が年末恒例「現代理用語の基礎知識選2019ユーキャン新語・流行語大賞」の年間大賞にも選出されるなど、令和元(2019)年はラグビータウンドカップに話題が集中した年として、これからも語り継がれていくことだろう。

ラグビータウンワールドカップ2019の開催に当たっては、今回訪問した熊谷市をはじめ、札幌市・釜石市・調布市・横浜市・袋井市・

豊田市・東大阪市・神戸市・福岡市・熊本市・大分市の全国12会場で熱戦が展開。熊谷市では埼玉県営熊谷スポーツ文化公園内の県営熊谷ラグビー場において、予選プール3試合(ロシア代表対サモア代表、ジョージア代表対ウルグアイ代表、アルゼンチン代表対アメリカ代表)が開催された。

《ラグビータウン熊谷》のスローガンを掲げ、平成3(1991)年度から「ラグビーによるまちづくり」を展開してきた熊谷市にとって、ワールドカップ開催都市になることはまさに悲願だった。その誘致を成功させるとともに、3試合とも超満員で合計7万1000人強もの観客動員を実現、パブリックビューイング来場者もほぼ同数に達するなど、埼玉県と熊谷市の協働で準備を行ったラグビータウンワールドカップ2019埼玉・熊谷開催は、大成功を収めた。

中枢部でそのけん引役を担ったのは、一般社団法人埼玉県ラグビーフットボール協会

きよし
清長
富岡
熊谷市長



会長を兼務する富岡清熊谷市長だ。

「熊谷市が《ラグビータウン熊谷》のスローガンを初めて掲げたのは、旧・熊谷市時代の平成3年3月策定の『熊谷市総合振興計画第二次基本計画』でした。それ以後、イメージアップ事業としてラグビーを媒介するまちづくりを、今日まで多角的に推進してきました。【※注】熊谷市は平成17(2005)年10月、大里町・妻沼町と合併し、新・熊谷市政をスタート。平成19(2007)年2月には江南町を編入」



ラグビーワールドカップ2019試合会場(熊谷ラグビー場)

平成3年はまた、熊谷市におけるラグビーのトピックスが連続した年でもありました。1月には《花園》の愛称で知られる全国高校ラグビー(第70回全国高等学校ラグビーフットボール大会)において、埼玉県立熊谷工業高校が埼玉県勢として初の全国大会制覇を成し遂げています。そして熊谷市総合振興計画第二次基本計画が策定された3月には、今回の



ラグビーワールドカップ2019の試合には市内の全小中学生を招待

ワールドカップ会場ともなった県営熊谷ラグビー場が完成しています。【※注/ラグビーワールドカップ2019に際し、熊谷ラグビー場は全面リニューアル】
こうしたトピックスは《ラグビータウン熊谷》のスローガンを新たに掲げる上で大きなバネになりましたが、ラグビータウンとしての素地は、実はもつとかなり早い段階から培われてきました(富岡市長)

その歴史は現在の埼玉県立熊谷工業高校、同熊谷商業高校の前身に当たる埼玉県立熊谷商工高校が《花園》に初出場した、昭和33(1958)年度に始まる。熊谷商工高校および



び、昭和41(1966)年に同校から熊谷商業高校とともに分離した熊谷工業高校は、それ以後、花園の常連校になっていく。さらにそうした背景もあって、昭和42(1967)年に開催された埼玉県体(第22回国民体育大会)で、熊谷市はバスケットボール、バドミントン、高校野球などとともに、ラグビータウンの素地は、実はもつとかなり早い段階から培われてきた(富岡市長)

「昭和42年の埼玉県体の際には、荒川の河川敷に2面のラグビー場が新たに整備され、



パナソニック ワイルドナイツの本拠地に建設中の宿泊棟(一般も利用可)



パナソニック ワイルドナイツの活動拠点となるクラブハウスは完成間近

その後、埼玉県におけるラグビー関連行事の拠点施設となりますが、それが平成3年に県営熊谷ラグビー場が建設される遠因ともなるわけです。

《ラグビータウン熊谷》の形成にとってもう一つ、同様に大きかったのは、昭和42年の埼玉国体の際に、埼玉県が教員の部のチームを強化する目的で、大学ラグビーの出身者を積極的に教員に採用し、熊谷市など県北の学校を中心に配属していったことでした。

大学ラグビーの選手たちが教員に採用されたのは県立高校が中心ですが、そのことにより、高校年代におけるラグビー部の強化だけでなく埼玉県北の都市、特にラグビー開催地

となった熊谷市における競技人口の底辺拡大につながっていきました(富岡市長)

着々と進むラグビーW杯後のレガシーづくり

そうしたラグビーとの深い関わり、平成3年の《ラグビータウン熊谷》の標榜ひょうぼう以後の多角的取り組みなどの積み重ねが、「最初は不利といわれていた」(富岡市長)熊谷市が、ワールドカップ開催都市の一つに選ばれる結果を、最終的にもたらしたといえるだろう。

令和元年に開催された《ラグビーワールドカップ2019》の熱狂と興奮の余韻は、全国的には少し沈静化している現状がある(令和3年2月15日現在)。ワールドカップの勢いそのままに、ラグビーが日本のメジャースポーツとしての地位を確立する年になると予測されていた翌令和2年の1月から2月にかけて、新型コロナウイルスによる感染症の拡大が急速に本格化。1月に開幕していた《ジャパングラグビートップリーグ2020》(以下、ラグビートップリーグ)は、2月23日以降の試合の中止決定を余儀なくされた。

さらに令和3年1月開幕が予定されていた《ジャパングラグビートップリーグ2021》については、複数のチームで新型コロナウイルス感染症の陽性者が確認されたため開幕を延期したが、2月20日、当初の予定からおおよそ1カ月の遅れで始まった。



パナソニック株式会社・熊谷市・太田市・大泉町で4者協定を締結

そうした状況下にあっても、熊谷市における《ラグビータウン熊谷》《ラグビーによるまちづくり》は滞ることなく、着々と進捗しんちよくしてきた。その最大の象徴は「令和3年8月に、ラグビートップリーグの強豪パナソニックワイルドナイツが熊谷市に本拠地を移すことになり、現在、熊谷ラグビー場周辺施設の改修や新設など、準備が本格化しつつある」(富岡市長)ことだ。

また、パナソニックワイルドナイツの熊谷ラグビー場への本拠地移転は、利根川を挟んだ「県境を越えた地域活性化」への胎動をも新たに生み出そうとしている。

「ワイルドナイツは昭和35(1960)年、群馬県大泉町に立地する旧・東京三洋電機の

熊谷市

市 政 ル ポ

(埼玉県)



市民の憩いの場「星川シンボルロード」



利根川対岸の千代田町(群馬県)とを結ぶ昔ながらの渡し舟(葛和町)



日本一暑いまち熊谷の名物「駅前ミスト」

部活動から出発し、平成9(1997)年からは、隣接する群馬県太田市に練習拠点を移し活動してきました。そして平成23(2011)年からはパナソニックによる三洋電機の子会社化に伴い、パナソニックワイルドナイツとして、引き続き活動を行っています。

熊谷市には、利根川と荒川という二つの大きな河川が流れていますが、熊谷市と利根川を挟んで隣接する太田市さん、大泉町さんとは、利根川の架橋に関する事業など、さまざまな形で連携してきた歴史があります。それが今回、パナソニックワイルドナイツの本拠地が熊谷市に移転することになったのを契機に、熊谷市・太田市・大泉町とともに、北関東でのラグビーの盛り上げ、地域振興を一緒にやっていきたいという意向をパナソニック株式会社から示していただいたことで、令和2年12月25日、4者による連携協定を結ばせていただきました(富岡市長)

それに先駆ける形で、ラグビーワールド

カップ2019開幕前の平成31(2019)年3月27日、埼玉県・熊谷市・パナソニック株式会社は3者間で「ラグビーフットボールを通じた地域振興等に関する協定」を結んでいる。そこに群馬県太田市・大泉町との連携協定が加わったことによって、パナソニックワイルドナイツを軸とする「ラグビーフットボールを通じた地域振興」はより広域的な取り組みへと進化することになる。それはラグビータウン熊谷の取り組みそのもののパートナーアップともいえるべき展開だが、同時に熊谷市にとつてのラグビーワールドカップ2019のレガシーづくり、すなわち次世代(未来)に受け継がれるべき記憶の継承事業、その結果もたらされることが予測される「未来の地域資源づくり活動」の一環にもなっている、といえるのではないだろうか。

暑さ対策日本一を目指す取り組みで 《殿堂入り》

未来の地域資源づくり活動という観点からは、令和2年7月、国土交通省がスマートシティの早期具現化に向けた「スマートシティモデルプロジェクト」において「令和2年度重点事業化促進プロジェクト」として選定した《熊谷スマートシティ》事業の今後が期待される。

日本最高気温41.1℃の記録を保持する《日本一暑いまち》としても知られる熊谷市らしい「暑さ対策」をはじめ、熊谷駅から約4km離れた「熊谷ラグビー場までの交通モビリティ向上」「防災」「産業創造」「市民のウェルネス対策」、ひいては「人口減少対策」など、当面の地域課題全般に対し、AIやIoTなどのデ

デジタル技術の活用で取り組む近未来プロジェクトだ。どの事業も本格的な取り組みはこれからだが、興味深いのはやはり、熊谷市ならではの「暑さ対策」「熊谷ラグビー場までの交通モビリティ向上」に向けた取り組みが、セールスポイントの目玉に掲げられていることだ。

『ラグビータウン熊谷』と並ぶ熊谷市のキャッチフレーズにかつては『あついぞ！熊谷』というものがありません。温暖化が進んだ近年は特に40℃超えが珍しくなくなり、平成30(2018)年7月23日に現在の日本最高気温41.1℃を記録するなど、熊谷市といえば『日本一暑いまち』として全国的に知られています。

実は全国的な猛暑に見舞われた平成16(2004)年に熊谷市の暑さがニュースなどで盛んに取り上げられるようになったことを契機に、暑さもここまでくれば貴重な地域資源ではないかという発想の下に、地域一丸となって街を盛り上げる活動を展開してきました。『商店街40℃セール』や『打ち水大作戦』などの民間活動に市から補助金を交付するなど、当初は暑さを逆手に取った情報発信を地域活性化の一つの手法として活用していたのです。

その後、平成19年8月に当時の日本最高気温40.9℃を、多治見市(岐阜県)さんと同時に記録してからは、全国的にも問題になり始めていた熱中症対策に、日本一暑いまち熊谷として『暑さ対策日本一』を目指し、積極的に



バス隊列走行実証実験の様相

取り組みようになりました(富岡市長)

熊谷市では平成22(2010)年度から若手職員有志10人前後のプロジェクトチームを毎年結成し、「暑さを活用した地域の活性化策」から「市民の健康を守るための暑さ対策」に至る取り組みを段階的かつ積極的に行ってきた。温暖化が全国的課題になり始めた当初から、暑さ対策の《先進都市》としての地歩を築いてきたともいえる。

その成果は例えば、環境省などの後援で今や全国的な運動となっている《熱中症予防声かけプロジェクト》における、熊谷市への評価の高さが証明している。熊谷市は同プロジェクト主催の《ひと涼みアワード》において、初年度の平成24(2012)年度から最新の令和2年度まで9年連続で、トップラン



平安時代に開基し、江戸時代中期に建立された地域の宝・妻沼聖天山歎善院聖天堂(国宝、妻沼地区)

ナー賞(6回)など主要各賞を受賞。令和2年度は市立荒川中学校の生徒たちの取り組み(ひんやりマスクの製作など)も「団結部門」で最優秀賞を受賞している。そして令和2年11月開催の《ひと涼みアワード》において、熊谷市は史上初の《殿堂入り》を果たした。

ワンチームで目指す 持続可能なまちづくり

また「熊谷ラグビー場までの交通モビリティ向上」については、既に令和2年11月、全国初となる「一般道でのバス隊列走行」の実現を目指すための実証実験の第一弾として、一般乗用車2台を使った隊列走行にも成功している。



ムサシトミヨが生息する清流・元荒川（久下・佐谷田地区）



世界中で熊谷にしかない淡水魚・ムサシトミヨ

「熊谷駅から約4km離れている熊谷ラグビー場への交通アクセスは、ラグビーワールドカップ2019の際も大きな課題でした。試合が行われた当日は、大規模な交通規制をした他、熊谷駅をはじめ、周辺五つの駅からのシャトルバスの臨時運行を中心に、車で来られる方にはパーク&ライド方式でやはりシャトルバスに乗り換えていただくなどの方法で、何とか対処いたしました。

そのときの経験も踏まえ、例えば今後、パナソニックワイルドナイツのトップリーグの試合、あるいは各種スポーツイベントが熊谷ラグビー場や熊谷スポーツ文化公園で行われる際などに限定して、一度で大量に運べるバス2台での隊列走行を取り入れたらどうかという発想から、熊谷市、熊谷スマートシティ推進協議会、群馬大学次世代モビリティ社会実装研究センターなどの共同で、今回は一般乗用車を使った実証実験を行ったわけです（富岡市長）

バス隊列走行は1両目の運転席にドライバーを置き、2台目の車両は運転席無人の状態で連結されるが、それぞれに運転席を持つ複数のバス車両での隊列走行は、類例がないとされる。この方式のメリットは3台以上の連結も可能なこと。運転手1人でバス2台3台の運行も可能になり、運転手の人手不足解消にもつながる。一般道でこうした形のバス車両を実際に走らせるには法的整備も必要になるが、これからの実験の積み重ねが非常に楽しみだ。

ラグビータウン、日本一暑いまちとしての特徴が際立つ熊谷市は、交通の要衝としての顔、産業都市としての顔、中世の武将・熊谷直実ゆかりの歴史豊かなまちとしての顔も持つ。日本一暑いまちとはいえ、稲田に水をたたくえる郊外の田園地帯には涼風が吹く。市内には利根川・荒川の伏流水が随所に清流を形

成し、そうした清流の一つ元荒川には世界でもここにしかない絶滅危惧種・ムサシトミヨが生息し、江南地区にはホテルが毎年観察できる水辺もある。

そのように実に多様な魅力を持つ熊谷市が、全員で同じ目標に向かい一つになろうという意味のワンチームのスローガンの下、世代を超えた市民協働で世界にKUMAGAYAを発信したラグビーワールドカップ2019を経て、前述のように今年8月には、ラグビータウンの重要拠点の一つになる。熊谷ラグビー場に隣接するエリアでは現在、パナソニックワイルドナイツのクラブハウスや宿泊棟（ホテル）などの建設が着々と進んでいる。

そうしたトップレベルでの環境整備の一方、熊谷市に拠点を置く女子7人制ラグビーの強豪《アルカス熊谷》が指導に当たる、幼少年期の体力・健康増進にも役立つタックルのない《タグラグビー》の小中学校での普及活動など、ラグビータウン熊谷の深化に不可欠な底辺拡大体制の構築も充実化の一途だ。

平成3年のラグビータウン熊谷の標榜から今年で30年目。旧・熊谷市最後の1期と新・熊谷市誕生からの4期を合わせ、足掛け20年目となる富岡市長のけん引する多様な魅力にあふれるまちづくりは、新型コロナウイルス感染拡大による閉塞感（へいそく）を吹き飛ばすような力強さに満ちている。

（取材・文＝遠藤隆／取材日令和3年1月26日）